

自然齋玄無法師家集

下

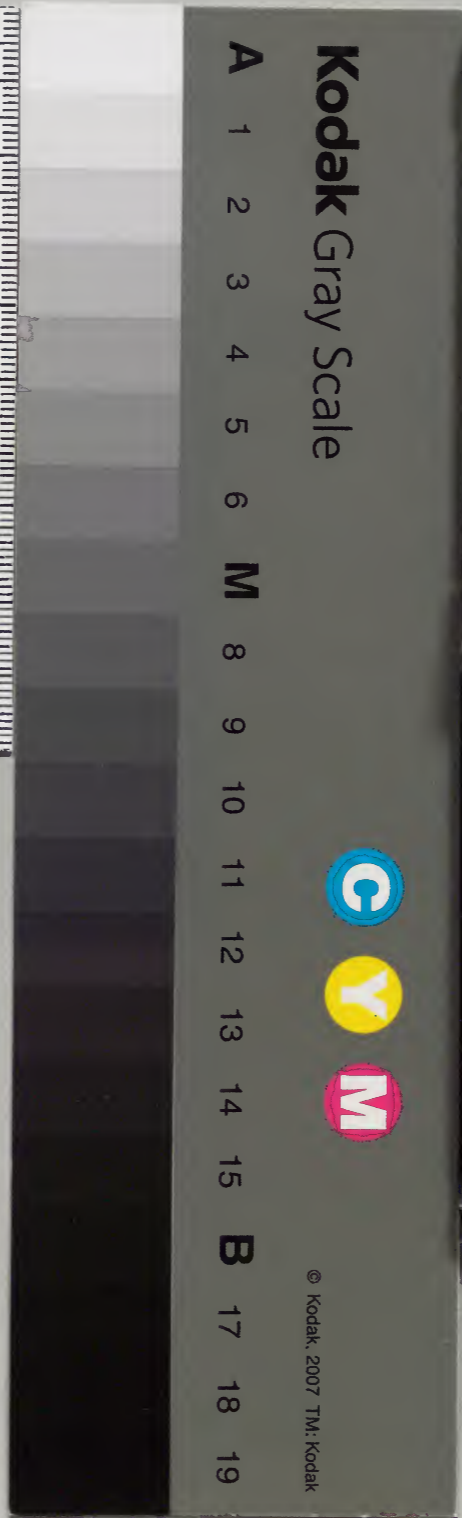
和歌雜詠

和歌雜詠

庫	文	閣	內
函	冊	號	類
二〇	二	二	和
二	四	二	書
一	三	二	
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 25421
冊數	3 ( 3 )
函號	201 689

共三本



自然齋玄無法師歌集下卷

戀部

恋

浅草文庫

あふれてのおふ瀬も〜らあ思ひ川身は〜もれ木のこらもよきてきて

思恋

せよ〜すむを〜らああまの〜かたうあそてやあよ流れや〜

初恋

あはれ〜もれは〜うけすや〜とせ川〜と〜月〜の〜あふせよ

稀恋

天は〜と〜わら〜はきりの〜あ〜と〜いづれのあふ瀬も程や〜このまん



なま恋

人へはあもつらつらなまは出づらふなまの母まゝつらん  
乳恋

つむも神にす信はあふれてうよねしらぬ夜のまつらん  
あふれてうよなを何とてのふまゝのしらぬ神のあのをいれよ  
恋恋

爰よまづつらよ思まきくさねいづらふくつらぬ夜のま  
夜もさねうよ思森の木のうよいづらぬちりのつらぬ根を  
根恋恋

あふなをいりお出らんくすの葉のうよふる中の秋をせ

なま恋

つれもあまき人のちまきの末のまづ信をいんふおもひさかりを  
まうけしちまきもあふなまをいぬむの花やうつかりらむ

旅恋

よむ枕さうあふのちよりもあいつらまゝこのふうせ  
えうしつらふも結をいん学枕ありねのよこの契をすらむ

妻恋

人へはあもつらつらなまは出づらふなまの母まゝつらん  
友恋

あふなをいりお出らんくすの葉のうよふる中の秋をせ

寄月恋

このこゝもあこむあゝ夜のつれなきを月おそくこつぬくこのま  
つれなきをあかさめぬてふく夜の月さくつよぬの心の輝

寄風恋

うあしすしちつさよよりのこゝの葉もういのぞあゝ風のおつれ  
秋うせのいつふよとめてあ中よとえぬ思の身ふくしむらん

寄あき恋

つれもなき人にさとどもふきのよとふいつまてきえんくちり

寄あな恋

さしやとちつよむのうよんれて神よおくれぬよびのむじろあ

いつとあぐわさて疾きあつれなきの身をうぬぬ神をくらり  
あもよふくちりてこゝもあきこくもあまのめあ中つれなき  
一のふもあちりてあゝ神のうつよぬとあけりく中の思ひに

寄数恋

人目のこゝのふあここのむあゝれ者せず神のうつふくさけて  
おとせぬ人をうつこの恋者神よあゝれのむとくこく

寄烟恋

いこつゝふらありの末とききもせられたてあまをうおあらん  
それをも人たいうてしられまいおあもひよくゆりあきを

寄あき恋

この中ふいつ秋色の吹をめてこころを神よらん

秋山恋

あふ坂のふてか名をやこりまゝこころの目を見こころあひ

秋恋恋

ふふけりこよあふれくふと年ハ春をね水やこよとらん

秋草恋

ちるそこよ秋もやいつれ人こころは芽子恋のあふこれて

それうしも人やとあんなのふ草一のこころのあふれを

秋途恋

こころせてまづにおやああやむこころちかこころあふつれ恨お

秋草恋

こころれをいうふせよこころをあふらへこころを告こころめん

いひよらんたあもよをふと中ハこころふとあふのねをのこころあ

をこころものあ一のこころあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

神のほけをむのこころあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

ひとあねのこころあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

秋虫恋

こころれあふ後うこよあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

秋後之志

Yamanomori no Ki no Ue ni Kurete wa Komori no Ue ni  
inochi no aoi no Ue ni Kurete wa Komori no Ue ni  
秋後之志  
青溪志  
秋の心は神にまをさし  
秋の心は神にまをさし  
秋の心は神にまをさし  
秋の心は神にまをさし

秋後之志

秋後之志

あはれなる秋の  
あはれなる秋の  
あはれなる秋の  
あはれなる秋の  
あはれなる秋の  
あはれなる秋の  
あはれなる秋の  
あはれなる秋の

雑部

曉

およ出て向もさりーひうつ月よけーあうつきのと

峰

吹下のやむふとまこのいぬをれてさあひくくものろそと

保

ちよ格来本ヤくくよクーれきよあかくの山のうけ

学

子のいんハあり来るぬもあさせてーの子はけふのよのむ

文



手枕よあつさふさふさうねいあれも森芝の夜をやのこせ

寺煙

夕ぐれの本るよええて一すらのさふもさひーをらの一し

心

山とふ山ありさうきふーのねの名に日本のおよまきことて

秋のくもりけさき心の名のおー一十月をまうせこそ

よそめもそれと一花のまうけてうーよひまふらふら

山崎よまうめて日枝山をまじ

昔よふりて名うよよ山のおもふをさふふやこのふーの本書

杜

一丁急をれこみおしてふささすいつら生田のまりの中うけ

一帯を待とーらふとまきすいつてのまりよむしてあけ

糸

あふり方の方の乃のやとまきーつはう糸のまのこしを

山中生水

谷風よひよて落ささき風いをふよくさく流のーらむ

河

すむけはこよひの名ー大井川秋もあふのつきおあうれて

きよ入てよよつれぬぬのおと相川岩こす波のむとらこ

海

伊勢のよやうとくもよきまわぬむく足ゆるあまのさか火

海浜

このうらさより波よらつくと来るもさるさきハまの浪風  
このうら風のまよへり舟の来ハいくさのよめんかきま  
り舟のよめりハとこらら海の来ハまよつくとくさる

島

よあこのしらゆめみて秋のよ月よめりけりまわつて

市

さあへんれとくれうららうららうららうららうららうらら  
これとくもよやうとくもよきまわぬむく足ゆるあまのさか火

美

さあへんれとくれうららうららうららうららうららうらら  
これとくもよやうとくもよきまわぬむく足ゆるあまのさか火

乃

交学をらては世の夕まら月もすしきこらさのあり

海

すむ月のけはらうらやとりとて行く秋のふくの海水

他岸

このうらよゆくともあつたよみて浪よる他のきりのよき

故

おとすみーとうりふまの名もあふれうーの初と終れ  
ころやれあれていくとせふら重のなき根よーくむらき生  
峰塚ふ尾せーやと九月十日あまりの次こそあまの  
出許よりうきまを傑させられて思ひやも森受  
よさそれ夜いの戸ふ麻さく月をも花の心と云は哥  
を納りたる時恐れをもうーつりえすーて出返ーしを  
なかりり

麻の赤も月もむらさき花の心とー高き恵もにーて  
同ー天とく尾空へあそむらけ時小山時意は供ふ  
まうりてせもあれてとむねー人ささーい

心とく日と知れと祿て障子ふあられいー

いよふら人目をうり小母をまれてむし歩き心とくひあま

田家

おまねしあまをーもあおきうてあまー田家の尾のをけそ

田家風

山田も尾のときーのおとつれに稲葉ようふ秋うせのこと

田家

あり来り小田のころー屋ふきせていふ葉をすく秋のむら

山家

さひーさの桜ととまされお人とひ来ー祿の秋の心と

山家友

葉の戸あけくこもささひねの友ものこも取いの心を  
山家松風

葉の戸あけくれよもささひくこもささひくこもささひく  
まゝあれそのおこつれくこもささひくこもささひくおくの松風

羈旅

こひねくあうつようかたねきくこもささひくこもささひく  
羈旅

まきりまふもくもあうてかうすくこもささひくこもささひく  
旅友

りくもささひのまうくもあうてかうすくこもささひくこもささひく  
旅者宿

ままうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
旅者夜毎

こひねくもまうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
とも火の光もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
旅は彼

よせくもあうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
伊勢よまうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

神旅の空戸のびくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

碓氷つらくはあか坂と云ふむらさき

こゝにありともうらも名のこゝして雲の戸らあか坂の心

因ふの心乃そ

岩るり細谷川の本うられて水音とやよはるけのこら

砂の女のいよ体ひて

花をあくそよあつともは砂の女うらとく葉のりあふと知

西の谷とてと人の極あふれり松のこゝにあたま

付あて

名もうらよこの心陰にそこめてむうらを松よあすすての葉

さてその松をと人の松と云ふうらあて

末のそよ一のこゝをこゝにまつの子年をうけてあつあつらめ

海生の女日大和ふよまうらふ敷を出て

のこけさの目うけは妻の顔やまいたてうすもふらそよのこゝ

南都お忌ぬあふりしきわらわ

そらうら山にこゝや互の名のこゝしてさうらあふりうらあつたさうら

春日山よそ

りこもふうきあつられり春日の心の杉のこゝにこら

柿木の奇塚よそ

こゝにありあかけとてそよまのりあ神のたつたれけめ

初瀬ふまうしてうら対

初瀬山も香ふこめてさうりあふ花よりひく入おのうね  
貫之のまの花とむうのまゆやひらうしよこよ  
ひ梅を一本らうれ

この葉の毛もいしよこゆの初瀬の山の梅の一本  
右世山を

霧も尾も香うしよわ咲らて花のおあきこよ世の山  
西り上人の庵のたありまをさふ若清らとて  
らをこて

右世山をよせよこけ清らくをさよものこよ  
松

こけ清らいつよねの葉の玉ねうこのいそりわ  
枝らきこまいのまわらうてま年を松のまのひとを  
うらうのまをいもふあうれていく秋へさる松の本をさ

松久友

子代も将うけお友と急おまてあう初増のまのま  
松と佳毛

松不改毛

松よさく花ハナをりいくのまをさうむむ代の中へ末  
二葉より子代をこめてやもえか松は百枝よ幾らうさ

和歌年

とよはふる名よ生初てひまのの子代ふる枝やせものころん  
おち葉さふびとつさす枝もくゆふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
松葉進条

ちきわおくふ葉の花の葉をていぐすりの松ふるとん  
葉代をすつよこめてやすりの花もたきか宿と葉らん  
松葉子年

ういりーの葉おとらよふとてうす松も子年のうけをほめて  
ふとせつんとあしもうくととあとの松ふりうかもをちよと  
葉松葉子年

つきせあや和奇の浦松いくたうともふ子年のうけお葉らん

百年もすくく葉のさくさくわ松よういりかしきわうとて  
松葉万巻

ういりーあ子年もさふすりの葉とこめりの松は葉りて  
葉代もういりか宿ふく葉のこめりもてか松の葉りバ  
名所松

いつのその尾との小まつとてうけさ砂の名うあかん  
炭と松

あしものくはあも子代のうけさきんあふさあまのまつの一巻  
庵と松

庭松

うせささの夕の影のおもつれも庭の一本のまのふのこして  
作不改毛

子年」をもうけてうらゝかふうともわびげくまうこれ竹のうけ  
妻林も同」こゝろのまふうよふひらよふ代のやゝのこれたけ

竹契五年

うゑおま」らまわをこゝろこれ林のまゐるや子代のうけをよすらん

竹契歌

子代もうねてこゝろのこれたけお同」歌のまや契らん  
い」子年」つまねよらひよさうんまて契はふまきこれ竹のうけ

竹之縁

すおやあゝはあまうらおまこあてこゝろはよこれ林」の陰  
うけふうよこゝろわらつき」これ竹の子ゑをよその有りふりて

竹為友

ま」寝てもうらゝか友とすおわねはあよあ」宿のこれ林  
うらゝ」の友と」あれよこれ竹のうけはまゑのまをふうあて

新

松うえのつきお紫うすふうさお来て同」子年の新の毛衣  
新契五年

よる浪もよらひもこもふ子代うけてらまわおせお子の浦新



もろもろふつよや歌いにく子代もうさねて焚れつるの毛衣  
ねうけのつよせぬ子代を日よかに更ふらねよるの毛衣  
いにく子代もうさねて焚れつるの毛衣  
ねうけのつよせぬ子代を日よかに更ふらねよるの毛衣

新巻年友

いにく子代もうさねて焚れつるの毛衣

新巻年

いにく子代もうさねて焚れつるの毛衣

浦新

いにく子代もうさねて焚れつるの毛衣

他巻新

あれてすむ他のころもいにく子代のうけをこよみの新の毛衣

名所鶴

彼うけてま年をまの友つらおのうけをやすこのおのま  
あまいうさあ一の浪よ新としてつよせぬ子代をここの浦つ  
夕くらねふ白雲の飛びをうて

外ふより家をとるなりりる時

あああれいこころふれ代の新よあつよてせいの時をほそ  
吹陸



ゆよられてまけに初秋の心ふうと移るよこもる入おのうね  
遠情思

しつねんいふくのぬもすなれるあうをしつねのおくの心  
ゆよゆよのよをあらうねの香を嵐のついでにいふもさる

谷雅史

のうれも位つき谷の秋夕ふつつうき年の乃や若しき

遠情思

こきつれてゆよゆよききあゆむや夕日の信はうらふつかりふね  
こつれてゆよゆよききあゆむや夕日の信はうらふつかりふね  
夕思

秋秋のゆよゆをうけてゆくやもころのなふうらういろうハ

述懐

一すらよ何をころろのこころこれよ老のむの結なりうらも

秋述懐

ろもてや身を思ひ森の手枕よあられ秋ふうきあまのこや火

獨坐懐

つこささハとう身ひつづのこころこころえらあまの信をよわ

老述懐

こころのこころ目ハさをれ老の信とふふとそやの恨を

老友述懐

ここの葉のうらみよむす急長くうらみもつよかとうの友人  
あはれあふむ祠もへてあくるこらふもものらふりつよせ  
仲秋初六日唱仙院殿うれせよせよひらきよすむ歌  
の月もふもりうれはよきて奉りけり

志のふそのおちうけとあむ月とあもせよけあよ秋夜のを  
從一位実徳公うられさせよせよひらきうれは思けれとも  
牌をなかりて

陰高き梢の秋のいろよきて枯野ふ沙る葉の下草  
十月の十五日の夜その御葬送の口供つらうまの  
りらふもりうれは月のおとえりれは

あはれそいとくゆくせのさよーられうけも定ぬ月あーられて  
雲を沙の身中うりらういこふ  
月うけハ山より西よ入をそく流のあまふ庭のまのつうせ

懐旧

思ひ出さるるこころをまろりて程神やう人のそくより  
あはれ懐旧

のこーおくそ葉の花を思森の木の葉あま人のそくより  
其の仄紙阿は沙の田記をえて  
いくまうふりあ一人の泣あうそ葉の葉の陰を沙れ

友懐旧

むくにおもふを祠もつよねそよひをのこす神のこち花  
しのおつよ神の小ねひよのこも名の人のむくし  
の言のこちを

秋懐旧

らうこのおもひのあいにそれあうら何れしよねね初月のけ  
あふことをしのかう朝のしよも神のあそふ杖のむくあ

寄月懐旧

そと宿えふとあうれにおもひもあすむ月しよふ夜はも

對月思昔

あそもおもひもさうするしよさうのふの朝の月お夜らん  
実後公うくれさせこまうはと年ふ

あうそそてもむくしよの夕くれあうしよ年の杖をうとして

吾懐旧

あられそふあうもうひあし七年のむくしようしよのしよくれ  
あそとえしむくしよのあのおもけを杖思存のこむくし

あはそと清しむくしよのおもけに神のしよくれ

昔者懐旧

り年のつもりそふ身おもあう人むくしよの言のあうこち

杖を思昔

年月の流れてあうあう昔をうつすこつすのけ

杖を思昔

いねうてふ程えらむのあゝめて昔おほゆるとち火のな  
神代

ての紫の乃のまことをもまはらふふ向のねさと神やうらん  
ちりひらふ同く光をわけてくる神代の山とありん  
神代はう角山の山とありんあふけしてこそあことをいふ  
そよ程光をとてあふまのそのまのあけのまうま  
ちりひらの同く光ふ天てらす神代の山とありん  
寄花神代  
そのくわふそすふある神代のあゝ時く光のまうま  
うけまうくくとき神の山とありんあふけしてこそあことをいふ

寄月神代

後とれてまうの山ふすむ月のひかりをまうまの  
寄花神代

天照す神はうとそこのむりあてて日くくそふうわり  
てらす日の神は神代の乃すらまうのすくこのうけもくも  
あまてらす光はまふす神代のまのうけまうのうて  
社代松

社代松

ああるそふ任うのうの松やうねてもう代をわらせて  
社代松  
往の江のまうのうくそく枝とまめくくさねてあふくくつ松

神松の枝もさかすかふとてをくしていく万代もさかすか

祝言

あふのひろよめとて万代も作くおつよとての葉のさか

祝言

この葉をつませおそふ借来てともむうのたのまを

すなふあつ万代の風とて民もも恵ふあひくおのやけけさ

つよせめや万代の末うけてさふよつやもやまておの葉

お祝言

万世のうけとておのたの葉を若ふさあづづるの毛衣

お祝言

治ゆる世はさかすかふとてさかすかすもやうかふとてあふ

お祝言

あふも同じめとてふとてはのおももささかすかあのお

お祝言

さうえりくたふあひきて民ももむをさふとてつまねこの葉

よむうすれまふ砂をさかすかあつて道ふよりさる若の浦浪

お祝言

神代より万代うけてさつおの忠戸いふたきむうももあ

いく子代もさかすかあをえんうこよあき葉のいとほさを保よて

お祝言

ふいせしむらきしむねの十のりを花びらうらなめてとん  
ふ代うけてさうんうけのほもわ花一ほのをもやほらん  
十のりの花をよりの松をふふ代のうけとふ花のしとん  
ちりしむねをそとふいふ代もうけてささめねの松のしとん  
松の葉のふふをうけてうらなむあしひふあしむねのしとん  
あしむらうらうらなめて竹の葉のをもふ代のうけやこすん  
ふれ竹のさうんむうけは生初てふ花やそそのうのり末  
年ふふ葉ゆうけのをもふふふ代も葉うね園のふれ竹  
り末のさうんむらうらな竹のうけ代うらなむあしむね

奇竹祝

いく妻もうらうて園ふれ竹のしとんやそそのやまの松  
そそは花をせむ花やもふふふの竹のうけをむむん  
そそめて葉えいつよしとんあるもしとんやとふれ竹  
生しとんむねのふの千代あやそふうらうてふれ竹のうけ  
奇花祝  
万代の妻と咲らしむふうらうらむの花のしとん  
いく妻のかさげやいつれしとん花ふ代万代の花は整む  
いく妻の葉もをこめて咲出る花はむらむらむらむら  
奇葉祝  
葉をおひあをむすいて白葉のをせむふ代を月あしむや



春祝

はるのよき代のことわりをいへぬの春よあけをふれあひのこころを

秋祝

いく秋のうらやみの花をさる神のまきあけをふれあひのこころを  
よふつ代もうけてこそをえぬふれあひの花をさる神のまきあけを

冬祝

もくぬきさきをさるふれあひのこころをいへぬの春よあけをふれあひのこころを  
四十二のまきあけをさる人のまきあけを

吹来もよき代のまきあけをさるふれあひのこころをいへぬの春よあけを

通詢法沙の八十のまきあけ

はのまきあけをさるふれあひのこころをいへぬの春よあけを待えて

霊元沙の八十のまきあけ

てつせれ八十のまきあけをさるふれあひのこころをいへぬの春よあけを

人の八十のまきあけをさるふれあひのこころを

八十のまきあけをさるふれあひのこころをいへぬの春よあけを待えて

正静延歌

春秋よいくせもあけをさるふれあひのこころをいへぬの春よあけを  
まきあけのまきあけをさるふれあひのこころをいへぬの春よあけを



Handwritten text in a cursive style, likely a poem or a letter, written vertically on the right page.

川喜田潭空翁詠藻

子姪に

みち流川うゑ代うりて天の戸の明る信乃ふ姪やまらん

山家花

おもひ入る山のおくも咲けは花よとすれて人とまきこく  
つらさの思はとひて其こゝの花よとすれぬ矣乃山住

子菫

まよふと山田のこゝめ長よ日のくまも知す子菫とまき  
桂とす門田のお女のゆふうせふあひく子菫の毛と涼き

毎後友月

毎々しゆふしの暮の秋らるる本乃涼しくいつる月け  
むら毎の名跡すくよ夏夜のをるれうふすある月け

浦五月

ふくる夜よりありやとて控るの浦澄とく月乃涼さ  
又る夜の月も夏なきうらせふうらら海士の釣舟

六月後

こころ川おしも涼しき夕ぐれは秋をうけゆる浪のふゆか  
こころす麻のゆかしそおあひは涼しくさる夜ハの川せ

七夕船

待つてあふ涼うらら秋ませの月おととく天の川ふね

天河あよ待つそ中ねよ何ふらふせをまぐつま近一舟

八月十六夜

あおけ程秋のちかうの名もこころひそよらるる月乃光を  
えあすよ秋の一夜のそよなき名を半月の氣のさやる

夜時毎

一しられ刺端の落葉おととて夏なきとふ夜ハの夜をひ

岡時毎

ももらせね松をくくや夕ぐれの雲のときをく程くく見  
一とかり時あられゆきをさうのしよ夕ぐけ跡す松の下寄

何處落葉

山阿もよもむしありふもら茶のくれあわふよ漸くの岩彼  
大舟川水とくやくあふふくもらをさけてさすく

燈火

さーとー炭ものこす圍の戸のぬくこくむふうの火  
妻もとむふとありの圍の中は寝るまゝこす灰の埋火

連日雪

巾着のこゑも埋れてさ雪の日うすふりぬる意のくれ井  
ふむ粒をささる雪も日もふれぬさ雪まぢふ人そ侍る

灰音

灰をふくこ福やの籠はくつとぬて雪ふあうあう井の中をれ

松風もおとちよ庭のさ雪ふぬくをきやまのさつと

山音

さりの聲松のあさるも埋れてゆふくれふよ山のさゆま

栄草梅

り年のさりもふくよ雪乃より妻をむくやふくめう枝

灰恋

来か人をささるぬては文を灰まぢくらの差をよのむはうあさ  
秋をさ新婦ふけゆく月ふささるささるさのちのち松

月お恋

さよふけて人の梢をさる月の枕のつゆふふけもさめす

しん中して後うやうの宵とこのむんあれあすのねやの月うけ  
泡

消るわあうまようふ山川の定るふよとむ水のこうこう  
あねね

あつこのころをとて陰ふまねと契る子代のりそ  
おひーるねよいくそのあまひてつよねこのりの陰とのとけよ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

爾然齋玄無法師碑銘敘

法師名玄無號爾然齋生于勢州阿濃郡  
津城下俗姓菅原世為郷之豪族也壯年  
自厭塵紛頓脫家累而晦跡於京洛性無  
華飾志好和歌曾入儀同三司藤實陰公  
之門親蒙教授已若干年公薨又依前叅  
議藤重季卿棲神詞林於是乎名頗聞遠  
近向老難髮麻衣菜食處躬節儉時或扣

余丈室咨詢法要可謂有道人風法師  
素崇信虛空藏大士遂卜地於西山法輪  
寺疆內而居之持咒之暇吟花嘯月逍遙  
自適貴介公子亦屢造焉寶曆五年乙亥  
初冬抱病不起終及十一月二十七日泰  
然而逝享齡七十一孝子潭空著存不忘  
乎心建碑舊廬之傍曰徵余記顛末余也  
久與法師善故畧書其所知以為敘

寶曆九年龍集己卯秋七月二十七日

靈龜山天龍資聖禪寺賜紫沙門堅翠巖撰

銘曰

生勢長京賦性溫柔管原之裔  
似續箕裘厥行不玷厥言寡尤  
厭塵界艱遁跡緇流寓情和歌  
讀書優游水兮滔滔雲兮悠悠  
塊一片石遺芳千秋

權中納言菅原爲成卿銘

從三位 清原宜條卿篆

權中納言兼左衛門督藤原隆前書  
有隱無顯法師之志也不有以著昭之孰  
能知其人耶菅黃門爲之銘翠崑和尚序  
之嗚呼千載之下適乎有耿光焉

寶曆九年歲在屠維單閼

龜峯賜紫沙門寅拙山誌

玄無法師感得舍利記

爾然齋玄無法師自誌云享保廿年乙卯  
十一月廿七夜之曉乃夢七八十齡老僧  
手持五寸許金塔舍利一粒忽然來于  
枕邊告云爾於我有緣者也是故授與此  
舍利必勿生疑即受其寶塔於掌上至心  
頂禮曰問師是何人老僧答云我是愚禿  
也以爾有曰緣故與之俄頃夢醒而深感

不可思議之事于時有物晃耀眼鼻之間  
旋轉墜來急切點燭照觀左右則果獲舍利一粒於是自意向稱愚禿者恐當親鸞上人今當上人正忌日之曉夢中辱蒙如上示誨嗚呼嗚呼不亦竒乎不亦悅乎予熟覽其所誌不勝嘉歎自匪法師信心所致何敢得有如此靈瑞曾聞笠置山解脫上人一夕夢感春日明神授與佛舍利三

十顆迄今數百年來留鎮南都興福多聞院世稱春日舍利者是也由是觀之與法師所感得實非異日之譚法師乃寶曆五年乙亥十一月廿七日安詳而逝世壽七十一彼此符合誰不感耶曰應孝子潭空之需記焉

寶曆九年己卯夏四月

天龍賜紫沙門翠崑叟

天鼓願成心門草高矣  
寶器以平之時夏四月  
少雲晴然  
十一日武井令將不願報自願奉平敵之  
平上意平一民母女口世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義  
敵世義而敵世義

まの遠祖尔自然齋を母と云はれ  
以まそのありきわらう世のあり  
飛字由しねおまきり世をたれ  
西よ死られわり嵐山のそと  
しるちまこつまのさつなよとむ大  
井川の月よまこつあけまの母乃  
こつまのね字まこつれさ  
ひすらねねるむおのまおらなむ



世をなれしあはれ思城求ふしき  
とを解めしをなすもふりあふさ  
きひよはかきりあめりき  
物夕れけりしのこまよはに  
つとえて涙もあはれつら  
潭水と云いぬおこしき  
をこしきあはれしあはれ  
やーしき世あはれしあはれ

世のつれらまはるるに  
ようれあはれしあはれ  
多之家し傳はれしあはれ  
うふしきあはれしあはれ  
しむるしき其志あはれ  
しきあはれしあはれ  
いあはれしあはれしあはれ  
あはれしあはれしあはれ

しんぎせむじまのいしつまふく  
るのみまきしつふまふふい本  
るりおまなむじまのくろくえ系  
十一月伊勢國安濃乃津の人  
川島田政明

慶應寺

